様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６２８

研究課題名（和文）「人類」というユートピア――19世紀フランスにおける社会的なものと宗教的なもの

研究課題名（英文）"Humanity" as an utopian notion; the social and the religious in the 19th century France

研究代表者
金山　準（Kaneyama, Jun）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：３０５３７０７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、宗教にまで高められた理念としての「人類」思想を主軸として、19世紀中葉のフランス社会思想の読み直しを図ることを目的とした。主対象はA.コント、P.ルルー、P.-J.プルードンの三者である。プルードンが人類思想の批判を通じて思想を発展させていく一方で、人類教を積極的に論じた論者も一枚岩ではなく、コントが過去の死者への崇拝を通じて社会の安定を図る一方、ルルーにとって人類とは領有しえない「無限」との邂逅の場であった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to reconsider French social thought of the 19th century through an analysis of the notion of "Humanity". If Proudhon's thought develops in confrontation with the religion of humanity, the views of proponents of this religion are far from uniform. While A. Comte considers the cult of the dead a solid foundation of the society, for P. Leroux it is a place of encounter with the "Infinite" that can not be fully appropriated.

研究分野：社会思想史

キーワード：フランス　社会的なもの　宗教的なもの　連帯　社会学　社会主義

１．研究開始当初の背景

本研究の開始に当たって想定していた学術的背景は、以下の三点である。

(1)フーコーの「統治性」論やロザンヴァロンの 19 世紀研究に触発されて活性化した、「社会的なもの」に関する 19 世紀思想史研究。これらの研究は 19 世紀研究を刷新したが、しばしば後に現実化する福祉国家体制の直接的源流となる支配層や主流派アカデミズムを対象としており、この枠組みの中ではサン＝シモンやコント、社会主義者などの多くの重要な思想家が十分に検討されていないと思われる。

(2)フランス共和国の根本原理の一つである「脱宗教性 laïcité」(Baubérot, 伊達聖伸)や、英語圏の「世俗性 secularity」論に見られるような、社会思想史における宗教への関心の高まり。19 世紀フランスにおいては、カトリシズムに取って代わるべき新たな精神的紐帯の樹立の企図が繰り返された（Bénichou)。社会の再組織化は宗教の復興と深くかかわっており、そこで重要な役割を果たしたのが、サン＝シモンの「新キリスト教」を前史として世紀中葉のコントやルルーで頂点に達する、人類そのものを神格化する新宗教の系譜であった。

(3)フランス 19 世紀思想史研究の有力な潮流としての、M. Abensour を嚆矢とする「ユートピア」思想（Ch・フーリエや P・ルルー等）の再考。この系譜の研究はユートピアを全体主義的な計画主義と峻別し、むしろそれを批判する「解放」の契機として評価する。本研究は 19 世紀のユートピア的想像力による社会構想をもっとも強力に駆動した象徴として、「人類」を検討する。

以上の一般的な学術的背景に加えて、研究代表者自身のこれまでの研究との関係として、人類教を通じたプルードン思想の再考という関心がある。研究代表者はフランス社会思想を専門とし、とくに 2011 年以降はプルードンを主たる検討対象としてきた。プルードンはふつう 19 世紀の社会主義者の代表的存在とされるが、その立ち位置は一般的に知られるよりはるかに独特である。

情緒的な紐帯による社会の再統合という 19 世紀前半の共通課題はネオ・カトリシズムやサン=シモン主義を生んだが、社会主義の誕生もこの文脈と深くかかわっている（宗教との親近性は無神論的なドイツ社会主義と対照的である)。そこで特権的な象徴となったのが「人類」であった。だが社会主義者とされるプルードンはむしろ「人類」の神格化への徹底的批判において際立っており、また当時広く見られた社会主義の宗教化の動向とも一線を画する。

社会主義者として一括りにされる思想家の間にかかる対立がある一方、ルルーとコントのように立場を全く異にする者が等しく「人類教」の語を用いている。

これらの事実から、（後世の論者が遡及的に設定した）政治的・哲学的立場によって研究が細分化されがちな 19 世紀フランス思想史について、「人類」という視点を通じそれらの枠を横断して当時の思想史を読み直すと同時に、プルードン研究を 19 世紀思想史のより広い文脈に位置づけなおす着想を得た。

２．研究の目的

本研究は、「人類」という理念に着目しつつ 19 世紀中葉フランス思想史の読み直しを図ることを目的とした。ポスト革命期フランスの社会思想にとってキリスト教に代わる精神性の発明は重要な問題意識であり、これが 19 世紀のフランス思想を特徴づける様々な新宗教の勃興をもたらした。その代表的なものが「人類」の宗教である。政治的・哲学的立場を越えて繰り返し用いられた「人類」の理念に着目することで、これまで同一平面で論じられてこなかった諸思想家を統一的視点から論じる。具体的な検討対象は、A・コント、P・ルルー、P-J・プルードンの三者である。

３．研究の方法

本研究は文献調査によって行なわれた。資料については日本国内に所蔵があるものやインターネット上（とりわけフランス国立図書館が提供するアーカイブ）で閲覧できるものも多く、最大限にそれらを利用したが、平成 29 年度にはフランス・パリでの資料収集も行った。

とくに扱う対象は A・コント、P・ルルー、P-J・プルードンの三者である。前二者は人類教の重要な主唱者として、またプルードンはコント・ルルーいずれとも関係が深く、また「社会」に関する重要な思想家であるが、他方では人類教の仮借なき批判者でもあった。また本研究は彼らの思想の網羅的研究ではなく「人類教」を通して見える重要な側面を扱うことを意図した。なおコントの人類教についてはすでに多くのことが研究されており、それらに加えて本研究が独自の成果を出す意図はない。コント研究は本研究遂行のための前提条件というべきものであり、最たる検討対象はプルードンとルルーである。

４．研究成果

19 世紀の宗教の復興はしばしば、カトリシズムに代わる情緒的紐帯の模索として語られてきた。だが人類教は情念を梃子とした社

会統合にとどまらない理論的地平を開いたことを、本研究は以下の二つの視点から明らかにした。

⑴人類の理念は、国民や友愛=兄弟愛をも越えた普遍的かつ平等な社会連帯の可能性を示した。他者がみな自身と「同類（semblable）〔似た者〕」であるという想像力の誕生によって初めて、互いの平等と不平等を問題化する視点が可能になる。プルードンの「正義」論は、二者間の「相互性」の正義として論じられることが多いが、彼にとって正義は「同類」間でしか成り立たない（人と狼、あるいは神との間に正義は成立しえない）。よってここで正義が成り立つその前提として、互いを「同類」として（言いかえれば、殲滅すべき敵や庇護すべき対象ではなく交渉・共存すべき相手として）認めることが必要となる。プルードンは宗教化された無矛盾の全体としての「人類」理念は拒否するが、互いを「同類」として認めるための場としての「人類」概念は、彼の正義論にとって不可欠のものとして組み込まれている。（以上についてはとくに雑誌論文①と④、また学会発表②を参照）

⑵個人と異なる固有の実在として捉えられた人類は、個と全体との関係という哲学的でもありまた社会科学的でもある問いを開く。

その際にまず焦点となるのは「無限」の観念である。単純化すれば、コントにおいては実体的に存在するのは人類という「無限」の全体のみであり、個人はその抽象でしかない。そのようなものとしての人類への崇拝が社会に安定性を与えるとすれば、ルルーにおける人類とは、未知性を残した領有不可能な理念としての「無限」と有限な個々の存在との出会いの場である。その意味で、人類とは、既存の「連帯」をつねにより広範な関係へと開いていく運動である。（以上についてはとくに学会発表②を参照）

他方、コントとルルーがそれぞれの仕方で人類と関係づけた「無限」の理念をプルードンは明確に否定する。社会の理念として「無限」に代えて提起されるのが、不調和で対立する存在間に成り立つ「均衡」である。人間は不調和な存在であり、そのような人間の根源的条件を無視して無矛盾の人類への一体化を唱えることはできない。プルードンの思想の根幹には、このような不調和な存在からいかにして社会が構築されるか、という問題意識がある。（以上についてはとくに雑誌論文①、③、④を参照）

なお研究期間全体を通じて、プルードンがいかに人類教と自身の思想を対置させながら思考を発展させていったかについては検討を予想以上に順調に進めることができたが、ルルーについては日本でほとんど紹介されていないこともあり、検討が十分には進められなかった。

他方で本研究から得られた展望として、19世紀フランスにおける「理性」と「社会」をめぐる問いがある。

プルードンによる人類教批判は、それに対する「理性」の強調と対を成している。プルードンにとって秩序の根拠は意志でも情緒でもなく理性である。しかもその理性の根拠は個人でもなく経験を超えたものでもなく、「社会」である。このような立論はむしろ19世紀前半のリベラルに接近する。その意味でプルードンの思想は、社会改革思想として社会主義の列に加えられる一方で、秩序に関する根本的な発想としてはむしろ当時のリベラリズムと共通する点が多い。本研究から得られたこれらの新しい展開への見通しは、学会発表①で部分的に示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

①Jun KANEYAMA, « De l'antinomie à la série ; la notion de l'équilibre chez Proudhon », *Cahiers critiques de philosophie*, no.17, 2016, pp. 207-224.【査読なし、招待あり】

②金山準「プルードンと弁証法」、『日仏社会学会年報』第 27 号、63-75 頁、2016 年.【査読なし、招待あり】

③金山準「神の主権と人間の連合――プルードンの連合主義論」『政治思想研究』第 16 号、206-237 頁、2016 年.【査読あり】

④金山準「「絶対」から「均衡」へ：前期プルードンにおける私的所有批判の論理」、『社会思想史研究』第 39 号、111-130 頁、2015 年.【査読あり】

〔学会発表〕（計　3　件）

①金山準「プルードンの集合理性論：自由主義と社会主義のあいだで」、社会思想史学会第 42 回大会（京都大学）、2017 年 11 月 5 日.

②金山準「プルードンとルルー；正義・人類・宗教」、フランス政治思想研究会（東京大学）、2015 年 12 月 18 日.

③金山準「プルードンと弁証法」、「甦るプルードン—『貧困の哲学』合評シンポジウム」、日仏社会学会・日仏会館共催（日仏会館）、2015 年 7 月 26 日.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者
金山　準　（KANEYAMA, Jun）
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：30537072

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)